鷹俳句雑誌　１９９９年６月号　句帳の余白（１５６）

資料：鷹　平成11年（1999）6月号 18P

句帖の余白（156）

湘子

ことしわが家の朴の第一花は、ちょうど五月一日に咲いた。例年より数日早い。

朴の木は私の眼の高さほどのところで三股に分かれ、三つの大枝が三派鼎立という形で空に伸びていた。ところが道路のほうに張り出している二本が、強風のとき電線に触れるおそれありというので、昨秋ＮＴＴだか東電の巡回車が私の留守に来て、途中からバッサリ伐ってしまった。触れそうな部分を伐るのは仕方ないと言ってあったけれど、予想以上に短かくなってしまった。憤懣やるかたなしの状態で数日機嫌が悪かったが、もとへ戻すすべはない。泣く泣く心をなだめたのであった。

この朴は一昨年、百ほどの花を咲かせた。朴の花も一年置きによく咲く年と咲かぬ年があるらしいから、昨年はさほど期待しなかったのだが、それでも七十くらいあった。ことしはまた百花を見られると思っていたのだが、どうも伐られた二本の残りの枝の花付きが芳しくない。ストライキでもやっているような按配だ。手付かずの一本の枝は好調だから、まあ五十花くらいは見せてもらえるだろう。朴の花は、風向きによって室内に芬々とつよい香りを送ってくれる。これから一ヵ月ほど楽しめそうである。

朴の咲く前の庭は、牡丹が二週間ほど楽しめた。私はその間ずっと牡丹の句を案じていた。

また、牡丹とは別に、花舗で薔薇を買ってきて、一週間ごとに違う色の薔薇を書斎に飾った。寒明けの声を聞いた頃から始めたので、ことしの春はずっと薔薇を観賞し作句したことになる。

薔薇も牡丹も綺麗で豪華で気品のある花だけれど、私にとってはこれまで距離を感ずる花であった。若い頃の貧乏性が、自分はこんな立派な花を詠む柄（がら）ではないと、勝手に決めこんでいたせいだと思う。けれども、いつまでもそんな気持じゃ駄目だという心奥の声が聞こえ、そろそろイケるだろうと唆す声もしてきた。それで、「やろうじゃないか」肚が決まったのであった。

十数年前、一日十句を三年やって終ったとき、どんな効果があったか、といろいろ訊かれた。効果というようなものはない、ただ俳句がますます好きになっただけだ、と答えてきた。けれどもここ一二年、もしかしたらこれが一日十句の効果かも知れぬ、と思えるような感触がときどきある。それをうまく説明できないのだが、強いて言うならば、詠もうとする対象とわりあい早くうち融け合えるようになった、と感ずることである。

牡丹も薔薇も、それだからあまり抵抗なく向き合えた。朝夕ゆっくり眺め、小まめに瓶の水を替えたりしていると、いままでの距離が消え、いささかは新しい発見があった。しかし相手は豪華を誇る名だたる花だから、簡単にうまい汁を吸わせてくれるはずはない。今年の句作がダメなら来年、再来年と、気永に向き合っている。

薔薇、牡丹、朴とつづく豪勢な花のリレーの期間に、私は第十句集『神楽』の最終稿をまとめた。どうやらやっと、という感じである。整理が遅れた理由の最大のものは、旧漢字にこだわらず大方は新漢字の表記にするということを、自分自身に納得させるためであった。それだから神楽も神樂とはしないが、どうしても厭だと思ういくつかは、旧漢字にした。混用である。秋櫻子と書いても秋桜子にされてしまう時代だ。粋がっていても仕方ないから、自分の手で始末しておこうというわけだが、ほろ苦（にが）い決断でもあった。